

小林 芳規

高山寺藏「寶志和尚傳」院政期写本について

小林 芳規

古本説話集の平仮名字体

山内洋一郎

前田家本色葉字類抄における訓の並記について

村田 正英

「来迎院本日本靈異記」に於ける「并」字と「並」字の用法

鈴木 忠

書陵部蔵医心方の訓法

松本 光隆

—— 助字の訓法を中心として ——

説話の待遇表現

東辻 保知

—— 打聞集と今昔物語集との関係をとおして ——

『純錦繡段抄』の漢文注と仮名抄

柳田 征司

漢字音の促音化とその表示法

三保 忠夫

—— お茶の水図書館蔵光明真言土抄勸信記による ——

大般若經誦音に於る漢音混入について

沼本 克明

漢語動詞と和語動詞との・語義上の対応・相関関係

佐々木 峻

—— 『三教指帰注』『光言句義釈聽集記』『法華百座開書抄』を資料として ——

最明寺本宝物集総索引稿 (一)

菅原 範夫

真福寺蔵新衆府注総索引 (一)

来田 隆

—— 本文篇・自立語索引篇 ——

福島教育国語史研究会

鎌倉時代語研究文献目録稿 (二)

金子 勲

三七一頁

一五五頁

二六七頁

八一頁

九一頁

一〇九頁

一三六頁

一頁

一三頁

二九頁

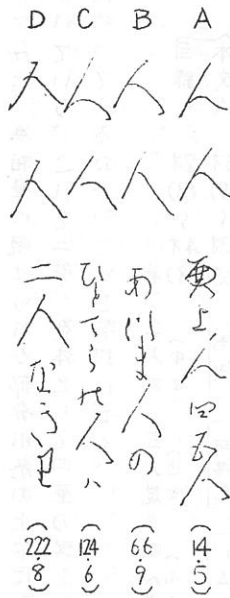
三七頁

五五頁

六九頁

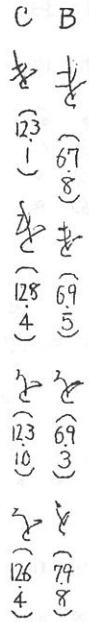
から、簡単に触れておく必要がある。(以下、前ページの区分によりA筆、B筆等と称する。例の所在はページ・行による。これは原本丁数の倍数に当る) A筆は印象が鮮かである。始め二三字を筆太にして整く細く連綿で続ける。息の長い筆である。濃淡の差が著しく、薄く細い線は微妙になり、影印も困難なほどである。B・C筆は似ていて、大小濃淡の差が少なく、全般に大きめの字形で通している。C筆の方が建統の字数が少く、古拙字版の趣きに近くなっている。D筆はA筆に近い書体であるが小さな字形で大ききこの変化少く書き続けていて、通覧しての印象はA筆と大きく異なる。

一行の字詰をランダムに抽出して討ると、A 197 B 187 C 192 D 218となつた。最低、最高の間に四字もの差があり、AとD、BとCの間にも差があった。個々の文字のうちまず漢字「人」を採り上げる。

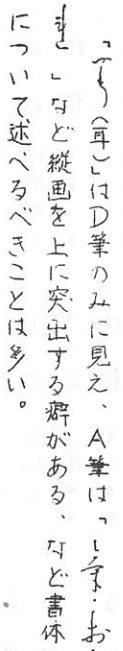


似ていて、同線上を返さず角度のできる書体である。また、Aに似るように見える多くも逆筆のようである。

次に異同の問題になるBとCについて、「遠く遠くを見よう。双方とも左上から右下へ筆を下ろしてから斜にはね上げるのであるが、はね上げた端から上へ廻りすか、下へするかわり別がある。



A・D筆はCの筆法である。これは「世」にも見られるものであるが、C筆には特異な次の書体が多い。



要するに、梅沢本本文は四筆であると思われる。

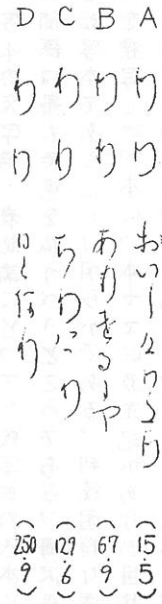
三、字体一覧

字体は一覧表によって概要を把握してみたい。(26)

初画を折返して後の運筆に四筆とも特色がある。初画のどの位置から二画に移るかを調べたのが下表である。AとCが似ているが二画の止めが、Aでは折返し点より上になる傾向が強く、Cは初画を戻らず狭い角度をなして右下へ曲がる。Bは止めの降る傾向が顕著で、Dは虚画を初画の左上に廻りし、中程かやや上から右下へ降る。他にもA筆に「人」(14.9)のごとく始筆が逆筆になる筆法があり、他筆に認められにくい、など特色を見出しうら、四筆の存在を確認できる。

筆	位置		
	下	中	上
A	55	8	0
B	8	33	2
C	55	0	0
D	0	26	50

返名では「り」についてみよう。



Aの第二画は初画より左に出ることがなく、その筆の打込みは順筆が多い。Bの筆法はAに似ているが、初画の上で強くなされている。Cは初画より左寄りに逆筆(返して)にして書く。Dの筆法はCに

上欄に平仮名字体を、諸字体の殆どを使用するA筆の書体を中心に模して、掲げた。近似字体を添えたものもある。字源の漢字をその下に置く。四筆それぞれ使用の有無、偏りがあるので、それを概観できるようにABC Dの順に記号で示す欄を設けた。記号は同一音韻を示す仮名異体の中での比率を示すものである。各筆について六ページを抽出し、その中の仮名により算出した。

- 10%以下 ○ 11.5 30%
- ◎ 31.5 60% ○ 61%以上

但し、この方法のみでは、字体表作製上は、微量の異体の脱落があるので、全巻を通覧し補った。書体の個人差と共に、同一人でも、行頭、行末、連綿の中途、墨つぎなどの位置関係や、筆の速度、筆圧などの運筆の様子、書写時の心理状態、丁寧さの推移、等の諸条件によって、書体に幅の出てくるのは当然である。本表の中で二三、字を併記したものは、この幅の著しいものである。

「そ」はD筆の特色で、筆者推定の鍵の一つとなろう。「た」は「た」と「た」に集中するもので、「は」「お」は草体の進んだ形で、異体と称するに至らぬものである。